

小児の誤飲防止の指導効果についての検討 - その2 -

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

研究協力者報告書

山中 龍宏^{*}、渡辺 博^{**}

要約： わが国の乳児の事故のうち、最も頻度が高いものは異物の誤飲である。諸外国と比較し、その発生頻度は異常に高い。誤飲防止の指導として育児雑誌を利用し、口径が32mmとなる円筒を作成して乳児の口に入るものをチェックする指導をした。雑誌のページを切り抜いて、実際に円筒を作成し使用した母親（190名）と、「自分は気をつけているから、そのようなチェックは不要である」と答えた母親（145名）に対し、7カ月後に誤飲の発生についてアンケート調査を行った。その結果、指導実施群では、誤飲の発生頻度が有意に低かった（ $p=0.037$ ）。今後、いろいろな地域や施設において、このような指導法の効果を検討し、誤飲防止の指導法を確立していくことが必要と考えた。

見出し語： 不慮の事故、小児の事故、事故防止、誤飲、安全教育

はじめに

現在、0歳をのぞいた1-19歳の小児の死因の第1位は不慮の事故であり、事故は小児の健康問題のうち最も重要なもののひとつである。

小児の事故は、小児の発達段階と密接に関連しており、年齢によって大きく異なっている。乳児の事故のうち、最も頻度が高いものは異物の誤飲である。生後5カ月を過ぎた頃から見られるようになり、その後約1年間は誤飲が多発する。

毎年、日本中毒情報センターから年報として中毒事故に関するデータが報告されているが、ここ5-6年間、その内容に変化は認められない。すなわち、小児の誤飲を防止する指導はほとんど行われていない、あるいは指導されていても有効な

方法ではないと思われる。

昨年、乳幼児の誤飲防止の指導方法の一つとして、育児雑誌に記事を掲載し、その直後に指導内容の実施状況について調査した。その結果、指導を実施したものは、回答者1,617人のうち14.3%であった。今回、記事の掲載後約7カ月経過した時点で再調査を行い、指導を実施した群と実施しなかった群のあいだの誤飲の発生率について検討した。

対象と方法

育児雑誌の特集として、平成7年12月号（発売開始は11月15日）に「誤飲」についての記事を掲載した。記事の最終ページの下段に、切り

* こどもの城小児保健部 (Department of Child Health, National Children's Castle)

** 社会保険中央総合病院小児科 (Department of Pediatrics, Shakaihoken Chuou General Hospital)

とって糊づけすると口径が32mmの円筒となるような図を掲載し、円筒の作成方法、ならびにこの円筒に入るものは床からの高さが1 m以上のところに置くように指導した。

アンケートの基本情報として、保護者の年齢、児の月齢、性別、第何子か、住所についてたずねた。第1回目の調査では、12月号を購入したか、購入した場合にはこの記事を覚えているかどうか、さらに記事に従って紙を切り抜いて円筒を作成したか否かについて質問した。また、円筒を作らなかった人には、なぜ作らなかったのかその理由をたずね、作った人に対しては使いやすさについてたずねた。

対象は、育児雑誌のモニターとして登録されている読者の中から無作為に、平成7年11月20日現在、生後3カ月から1歳2カ月の乳幼児を各月齢とも170名ずつ選び、平成7年12月1日にアンケート用紙を送付し、12月末日までに回収されたものについて分析した。

第1回の調査のアンケート送付数は2,040枚であり、回収数は1,614枚(79.1%)であった。記事が掲載されている12月号を購入した者は1,328名(82.3%)であった。記事を記憶していた母親は1,066名(81.0%)であった。実際にスケールを作成したものは262名で、雑誌を購入したもののうちの19.8%、記事を覚えているもののうちの24.6%であった。

スケールを実際に作成しなかった821名の理由としては、作るのが面倒(36.7%)、作ろうと置いて忘れてしまった(27.0%)、気をつけているので作る必要はない(17.7%)、などであった。

スケールを作成し実際に使用した母親は190名

(作成した人の72.5%)で、雑誌を購入した人全体で見ると14.3%であった(指導を実施した群)。一方、このようなチェックは不要であると答えた母親は145名であった(指導を実施しなかった群)。

そこで7カ月後に、両群の合計335名に対して、郵送による第2回の調査を行った。平成7年12月1日より平成8年7月はじめまでの約7カ月間に、誤飲しそうになったこと、および誤飲の有無とその回数、誤飲したものの種類、発生場所、誤飲後の処置について質問した。

結 果

アンケートの回収数は278枚(83.2%)であった。誤飲の好発年齢を考慮し、調査開始時の月齢が2カ月より14カ月、すなわち第2回の調査時の月齢が9カ月から21カ月のあいだの231名(平均月齢8.7カ月)について検討した。第1回調査において指導を実施したと答えた群で、7カ月間に誤飲なしと答えたのは、124名中26名(21%)であった。指導を実施しなかった群で、誤飲なしと答えたのは、103名中11名(11%)であった。これらより、指導を実施した群では誤飲の発生頻度が有意に低いことがわかった($p=0.0367$)。

誤飲した物質として最も多いものはタバコであり、52名(22.6%)がタバコの誤飲を経験していた。このうち、医療機関を受診したものは4名(7.7%)のみであった。

考 察

わが国において、小児の誤飲について継続的にデータを収集しているのは日本中毒情報センターだけである。

1995年4月から96年3月の1年間に、日本中毒情報センターが受信した電話の総件数は37,268件（単純計算で14.1分に1件）であった。そのうち0-4歳の中毒事故が83.2%を占め、1歳未満が10,748件、1-4歳が19,095件であった。0-4歳の電話による問い合わせは92%が一般家庭からであり、事故発生から問い合わせまでの時間は、10分以内が44%、1時間以内が85%であった。摂取物質は1種類だけのことが多く、問い合わせ時に何らかの症状が認められたものは5-7%、物質や摂取量から判断して症状が出現する可能性がある場合は全体の13%であった。その内訳では、農薬が35%と最も高く、次いでアルコールなどであった。

誤飲した物質の中でいちばん多いのはタバコ、続いて医薬品、化粧品、洗剤、殺虫剤の順となっている。

これらのデータについてみると、毎年ほとんど変化がみられず、また乳児の誤飲の発生率は欧米に比較して異常に高いと報告されている¹⁾。

小児の事故防止活動を展開するにあたっては、1)発生頻度が高い事故、2)重症度が高く、後遺症を残しやすい事故、3)何らかの解決法がある事故から取り上げる必要がある。その意味では、有効な誤飲防止活動を展開する必要がある²⁾。

誤飲防止の指導の一つとして、乳児健診などを利用し、保護者に安全チェックシートを渡して記入してもらう方法がある³⁾。このシートによって、保護者は自分達が住んでいる家や子どもの状況を考えつつ判断し、回答する時点で安全教育が行われるようになってきている。記入されたシートで特に指導すべき項目がわかり、具体的な事故の例をあ

げつつ指導できる。しかし実際に使用してみると、誤飲に対する指導効果は十分ではないように思われた。

異物の誤飲防止の指導内容として現在行われているのは、

- 1)乳幼児期は、手にしたものは何でも口に持っていく時期である。
 - 2)畳や座卓の上など、高さが1メートル以下の場所に、
 - 3)口径32mm以下の大きさのものを置かない。
 - 4)部屋や身の回りのあと始末を心がける。
 - 5)ジュースの缶を灰皿代わりに使ったり、コーラやドリンク剤のびんなど飲物の入っている容器に食品以外のものを入れない。
 - 6)灯油缶に使用する簡易ポンプは小児の手の届かないところに片づける。
- などである。

デンマークや米国ではプラスチック製の円筒が作られ、乳児健診時に保護者に渡され、乳幼児の口に入る大きさのものをチェックする指導が行われている。プラスチック製のものを作成すると経費がかかるので、今回は紙を切り抜いて円筒を作成する指導法を考えた。

今回、円筒を作って指導を実施した群と、気をつけているからそのようなことは必要ないと答えた群に対し、誤飲の発生についてアンケート調査を行った。その結果、指導を実施した群では、誤飲の発生率が低下するということがわかった。

わが国における誤飲防止の指導法を確立するためには、今後、同様な誤飲防止活動を各地域の医院、保健センターなどで展開し、その効果を確認することが必要であろう。

文 献

- 1) 石沢 淳子：中毒センターからみた小児の誤飲事故。日本小児科学会雑誌，98：1833-1836，1994.
- 2) 山中 龍宏：小児の事故防止へのアプローチ—オーストラリアのセーフティ・センターの活動について—。
- 3) 山中 龍宏・他：乳幼児の事故防止へのアプローチ—安全チェックシート使用の試み—。日本医事新報，No3521：30-34，1991.
- 4) 山中 龍宏：小児の誤飲防止の指導効果についての検討。厚生省心身障害研究「生活環境が子どもの健康や心身の発達におよぼす影響に関する研究」平成7年度研究報告書、p. 129-132，1996.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: わが国の乳児の事故のうち、最も頻度が高いものは異物の誤飲である。諸外国と比較し、その発生頻度は異常に高い。誤飲防止の指導として育児雑誌を利用し、口径が32mmとなる円筒を作成して乳児の口に入るものをチェックする指導をした。雑誌のページを切り抜いて、実際に円筒を作成し使用した母親(190名)と、「自分は気をつけているかち、そのようなチェックは不要である」と答えた母親(145名)に対し、7カ月後に誤飲の発生についてアンケート調査を行った。その結果、指導実施群では、誤飲の発生頻度が有意に低かった($p=0.037$)。今後、いろいろな地域や施設において、このような指導法の効果を検討し、誤飲防止の指導法を確立していくことが必要と考えた。